
愛する君へ

みゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛する君へ

【コード】

N7406E

【作者名】

みゆう

【あらすじ】

相手の苦しみなんて、本人にしかわからないこと。幸せの裏は…。この小説は、ゆっくりと呼んでいただけたら幸いです (^| ^)

記憶と夢と現実の狭間で〜1（前書き）

駄文ですが、よろしくお願ひしますf^_^
| ^ ^ ;

記憶と夢と現実の狭間で1

ここはどこ？

真つ暗な世界。

光の届かぬ暗く深い闇。

「私は、一体…？」

気が付いたら、彼女はここにいた。

こんな場所で、何をしろというのだろうか。

彼女は、座り込む。

ここは落ち着く。

理由は解らない。

闇でしかない、この空間。

彼女は何も覚えていなかった。

【ぼたっ】

突然、何かが手に落ちた。

(…?)

これは、何？

水？

けど…

なんだか、あたたかい。

誰か…が…

泣いて…る？

誰？

泣かないで…

…そばに…
ずっと…そばに、いる…か…ら

「…ン」

あたたかい光が降り注ぐ。

彼女は、静かに目をあけた。

ボヤけた視界に光が広がる。

「恵子！」

私は、声がる方にゆっくりと視線を向けた。

そこに居たのは、見知らぬ男性。

必死に叫んでいる。

今にも泣きそうな顔…。

そんな彼を、私は

ただ眺めていた。

「恵子！恵子！良かった…待ってる」

彼は騒ぐだけ騒いで慌ただしく部屋を出ていく。

(…騒がしい人…)

しんと静まり返った部屋。

白い部屋に白いベッド。

病院…なのかもしれない。

まるで正反対の世界に、彼女は苦笑した。

あれは、夢だった…？

バタバタバタ

【ガラッ】

(また、来たのね…)

彼の騒がしさが、ここが夢ではないのだと感じさせた。
彼女は静かに笑った。

そう。

あれは夢。

ここが現実なんだと、彼の存在が示す
だけだ。

泣いていたのは…？

確かに、誰かが泣いていた。

あれも…夢？

「恵子…？どこか痛むのか？」

突然、彼が心配そうに覗きこんできた。

「…え？」

目が覚めてから初めて、声を出した。

何故だか、喉がヒリヒリする。

そのせいか、音にはならなかったが。

「だって…泣いてる…」

彼の言葉に、初めて気付いた。

泣いていたのは、私。

これは夢の続き。

理由は解らないけれど。

彼はハンカチを取りだし、私の頬に軽く当てた。

「恵子…目を覚ましてくれて有難う」

彼は優しく微笑む。

きつと、ずっと心配していたのだろう。

私は口を開いた。

と言っても、声にならない声で。

「あ……りが……と……」

ちゃんと伝わったかしら。

私は、彼の顔を見た。

うつすら目がうるんで見えるのは気のせい？

コンコンコン

【ガラツ】

入ってきたのは、全身

真っ白い服を着た人。

彼は勢いよく立ち上がったかと思うと、いきなり相手の両手を握りしめ頭を下げている。

「先生！有難うございました。」

先生？

そっか。

この先生……。

先生は私に向かって歩いて来た。

「恵子さん、痛いところはありませんか？

少し、喉が痛むかもしれませんが病気じゃないので心配しなくても良いですからね」

私は、頷く。

先生は優しい顔で笑った。

「あ……の……」

私は、どうしても聞きたいことがあった。

「なんですか？

ゆっくりで良いですからね」

まるで幼い子供に語りかけるように優しく話す。

「……わ……た……し……の……な……ま……え……って……ケ……イ……コ……？」

その言葉を言った瞬間、先生と彼は固まった。

言葉は届いたはずだ。
だけど、不安になる。

「…え…と」

先生は、また先ほどと同じように笑顔になった。

「そうですよ。」

あなたの名前は”恵子”さんです」

それだけ伝えると、先生は立ち上がった。

「また来ますね」

私は先生を見送る。

姿が無くなって、私は軽く息を吐いた。

(恵子…私の名前…)

記憶と夢と現実の狭間で2

パタパタパタ…

廊下に足音が響く。

「待って下さい！先生っ！」

彼は、先生の服を掴んだ。

「先生！恵子は…恵子は…」

険しい顔の彼。

先生に掴みかかり怒鳴り声に似た声で叫ぶ。

そんな彼の手を。

そつと握り、

ゆっくり服から離れた。

そのまま。

顔を上げて彼を見る。

そして…。

口を開いた。

「恵子さんは、記憶喪失です」

「っ」

彼は

言葉を失った

「……………」

沈黙が流れる。

なんとなく…

なんとなくだけど…

そんな気がしていた…

目を覚ました彼女は、

とても…

穏やかだったから。

あいつは、決して泣かなかった。

だから…

大丈夫なんだと…

そんなはず…

ないのに。

初めてだった…

あいつの涙を見たのは…

「…つを…」

沈黙を破ったのは、彼だった。

拳をギュッと握り、うつ向いたまま話し始める。

「あいつを…」

記憶喪失にさせたのは…

あいつを追い詰めたのは…

オレなのかも…

しれない…

そばに居たのに、気付いてやれなかった。

あいつは…

恵子は…っ大丈夫って…

大丈夫なんだと…

彼の瞳から涙が溢れ出す。

「オレ…

あいつに言っただ。

”お前は強いから、

オレの気持ちなんて

わからないんだろ”…って…」

先生は、何も言わなかった。

彼は、更に続ける。

「先生…

あいつは…恵子は…

何も思い出さない方が…

幸せなのかもしれない…」

先生は、やっと口を開いた。

「…そうかもしれませんが。

だけ…

そうでないかもしれない…

それを決めるのは、

恵子さん自身ではありませんか？」

それだけ言うと、

彼に背を向けて歩き出した。

残された彼は、

ただ…

離れていく背中を見つめていた。

あの日

その日は、
とても穏やかな日だった。
前日の雨のおかげか、
とても空気が澄んでいた。
だから、あの日…
オレたちは家族で出掛けたんだ。
産まれたばかりの娘を連れて、3人で。

とても…

幸せだった。

永遠に続く…

そう…

信じていた。

一緒に眠った。

一緒に遊んだ。

一緒にご飯を食べた。

一緒に歩いた。

一緒におしゃべりをした。

一緒に…

一緒に…

これからも、一緒に何でもできると思っていた。

恵子は、いつも笑っていて…

たまに怒って…

そんな、あいつといると…

いつも笑っているオレがいた。

娘の奈緒も笑っていて。

幸せだった。

だけ…

そんな幸せは…

いとも簡単に、音を立てて…
崩れ落ちるんだ。

一瞬の出来事だった。

帰り道。

3人で歩いていた。

奈緒は恵子に抱かれて。

腕の中でスヤスヤと

眠る娘は

とても幸せそうで…

あんまりカワイイから…

笑いながら

二人で見つめていた。

【ドンツ】

キーーーーッ

鈍い音とともにブレーキ音が辺りに響き渡った。

【ガッシャン】

直後に衝突音。

居眠り…

だったらしい。

最初…

理解ができなかった。

目の前で…

血を流している

親子が倒れている…。

まるで、金縛りにあったように
体が動かなかった。
信じたくなかった。

だって…

さっきまで横に

居たんだ。

さっきまで奈緒の寝顔を

恵子と二人で

見て…

なのに…

なんの冗談なんだって…

だけど…

まぎれもない事実で…

ピーポーピーポーピーポー…

遠くから救急車の音が聞こえてくる。

病院に運ばれた二人は、

すぐに手術室に運ばれた。

恵子の方は、軽傷で済んだらしく

すぐに出てきた。

だけど…

「賢司…奈緒は？」

生気のない彼を訪ねる。

「まだ…」

「そう…」

沈黙が流れた。

「お前、やっぱり泣かないんだな」

「泣くのは、いつでもできるから…」

その言葉にカツとして恵子を睨みつけた。

「お前は強いから…」

オレの…

オレの気持ちなんて

わからないんだろ！」

気が付いたら怒鳴っていた。

「何、言ってるの？

本気で言ってるの？」

彼女は冷静で。

オレは言葉を失った。

「っ」

「ランプ消えたわよ」

【カラカラカラ】

しばらくして手術室の

ドアが開く。

同時に賢司は立ち上がり先生に駆け寄った。

「先生！奈緒は…」

その言葉に
首を横に振る。

「全力を尽したのですが…」

【バタツ】

直後、恵子が倒れた。

「おい！恵子！」

賢司の声は恵子に届かなかった。

記憶〜終わりと始まり〜

コンコン

【ガラッ】

「恵子…」

気分は、どう？」

その言葉に恵子は
つい笑ってしまった。

病室を出てから1時間くらいしかたっていないのに…。

「何？」

笑っている恵子を見て、少し複雑な顔でたずねる。

私は、微笑んだ。

「そ…いえ…ば、あ…なた…、わた…しの
こ…と…し…ってるん…で…でしょ？」

彼が表情を曇らせたように感じたのは
どうして？

「ん…知ってる…」

どうして…

彼は、寂しそうなんだろう…

「ゆ…めを…み…たの」

別に…

彼に、話す必要なんて
ないのだけれど…

寂しそうにしている彼を見た瞬間、
話してみようと思ったから。

「いま？」

さっきまでの表情は、もう無くなっていた。

(良かった…)

私は、安心する。

理由なんてわからないけど、
笑っていてほしいから。

私は話を続ける。

「ううん。

ねむっ…て…た…あいだ」

彼は、イスに座り

続きを促す。

私は、頷き話し始めた。

「闇…の中…に居た…の。

何故だ…か…

すぐく、落…ち着い…た。

変…だけ…ど」

私は、コップに水を注ぎ

一口飲んだ。

喉が、すーっと潤う。

そして。

また話し始めた。

「誰かが…泣い…てたの。

だから…言ったの…。

”泣か…ない…で

ずっ…と、そばに…いる…から…”って…。

けど…

起きた…ら…

泣いて…いたの…は、私…で。あれは、誰の

…言…葉だった…のか…な？」

”泣かないで。

ずっと、そばに居るから”

この言葉で、長い眠りから覚めた恵子。

こいつは、ずっと泣いていたんだ。

”闇”が落ち着くと言っていた。

そのくらい、苦しかったんだ。

自分が泣いていることも

わからないくらい…

奈緒、お前なんたる？

お前が…

お前が、

そう望むのなら

「気にすることはない。

ただの夢だよ」

彼は、優しく笑う。

何故？

彼の笑顔に心が温かくなる気がした。

そっか…。

夢…なんだ。

当たり前じゃない。

わかってたこと。

クスクス笑う私を

彼が見つめて微笑む。

「恵子」

突然、名前を呼ばれて胸が高鳴る。

「な……に……?」

「今、幸せ?」

真面目に話す彼が

おかしくて、顔が綻ぶ。

「う……ん！」

しあ……わ……せ……!」

それを聞いた彼が大笑いした。

目に涙をためて……。

なによ……

涙が出るほど笑わなくても良いじゃない。

ちよつといじけてみせる。

それを見た彼は、涙を拭きながら謝ってきた。

仕方ないので機嫌を直すことにした。

「それよ……り、あな……たの名……前……教えて?」

「オレ? 賢司!」

彼はニツコリ笑う。

「賢司……君……ね」

名前を呼ばれて……

一瞬ズキンとした。

だけど、彼女は

もういない。

きつと、この先

彼女が

” 賢司 ”

を思い出すことはないだろう……

これで良かったんだろ?

奈緒…

オレと恵子は

また ここから始めよう。

振出に戻ってしまっただけで、

オレたちなら大丈夫だから。

もう…

一人で泣かせたりしないから。

『ママ、泣かないで。

ずっと

そばにいるから。

私のこと忘れていいよ？

ママには、いつも笑っていてほしいから…』

数年後

「賢司君、…気になっていたんだけど…私と初めて会った日って…
いつ？」

彼女の質問にオレは笑って答えた。

「何、ボケてるんだよ。

病院だよ。

恵子が目を覚ました

あの日が初対面」

「ウソ。

もう！賢司君のイジワル」

彼女は、いじけて足早に歩き出す。
その背中を追いかけながら、オレは思う。

ウソじゃない。

君と彼女は別人。

君は、よく泣く。

君は、よくいじける。

君は、そつと笑う。

彼女は、ずっと笑っていた。

彼女は、いつも凜としていて泣かなかった。

彼女は、いつも前だけを見ていた。

彼女は、…強かった。

彼女は、…オレを…

”賢司”と

呼んでいた。

今、君は

奈緒と天国で

遊んでいるんだろ？

そう思うことにする。

だから…

絶対に忘れないよ。

君と過ごした

大切な日々を

記憶〜終わり〜と始まり〜（後書き）

最期まで、お付き合ひ頂き有難う御座いました（〇 ^ ^ 〇）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7406e/>

愛する君へ

2010年11月24日05時21分発行